

老健リハスタッフによる地域リハの可能性

～ショートステイ利用者へのアプローチから見えてきたもの～

あい介護老人保健施設
○ 理学療法士 大塚大介

【はじめに・目的】

あい介護老人保健施設（以下、あい老健）の入所リハビリ係では、地域リハの充実を目指している。今回、あい老健における地域リハサービスの一つである、ショートステイ（以下、SS）に注目した。ここ近年、SS 利用中のリハビリニーズが増えてきている。増加している背景として、SS 利用中でも身体機能や ADL を維持したい、さらなる機能向上を目指して積極的にリハビリがしたい、という希望が利用者やその家族から聞かれている。SS 利用者へのアプローチとしては、入所利用中の個別リハビリが主であった。しかし、短期間の利用中における個別リハビリのみでは最低限身体機能を維持するに留まり、更なる機能向上を目指すのは難しい。リハビリニーズが増えてきている SS 利用者へのアプローチを今後更に充実させるため、利用者の自宅へ訪問してサービス担当者会議（以下「担当者会議」）に参加させて頂いた。また、あい老健の地域リハのアプローチとして訪問リハビリサービスの開始を検討している。そこで、SS 利用者や家族に対して訪問リハに関するアンケートを実施した。これらの試みから、新たな地域リハの可能性を見出す事ができたため、ここに報告する。

【調査方法】

- ① SS 利用者の自宅で開催された担当者会議への参加（参加件数：2 件）
内容：家族や在宅ケアマネをはじめ多職種間での会議、自宅環境の確認、介助方法の確認等
- ② 訪問リハに関するアンケート実施（期間：H24. 10. 8～11. 2。実施 20 件、有効回答数 20 件）
対象：現在 SS を利用されている利用者または家族
内容：訪問リハビリ必要性の有無、希望するリハビリ内容等

【結果と考察】

調査①について

SS を利用されている 2 ケース（A 様、B 様）について、自宅で開催された担当者会議に参加した。A 様については、自宅での段差昇降の際につまずく事があるとの意見を担当者会議の中で聞くことができ、その後の SS 利用から階段昇降を実施するプランを新たに追加した。B 様については、在宅ではリハビリは受けておらず、SS 利用ごとに全身の関節拘縮が進行していた。担当者会議の際、在宅ケアマネと共に訪問リハビリの必要性を家族に説明し、その後訪問リハビリが開始された。この様に、担当者会議に参加した 2 ケース共に、会議参加後に新たなプランの立案やサービスを開始することができた。これらは、実際に担当者会議参加により自宅環境を確認したことや、家族・他事業所のスタッフと話し合うことができた結果であると言える。

調査②について

アンケートの結果、55%の方々から「老健と同じリハスタッフによる訪問リハを受けたい」「現在訪問リハビリを受けている」との意見を頂き、地域の訪問リハに対するニーズは高いと考えた。

【おわりに】

今回の調査により、今までの様に施設内だけでリハビリを完結させるのではなく、これからリハスタッフは地域へ出向いていく必要があると感じた。担当者会議への参加や家屋評価の実施に加え、訪問リハのサービスが開始されれば、地域リハの可能性はさらに広がるのではないだろうか。今後の可能性として、SS 利用者に加えて入所利用者が自宅退所された後の訪問リハについても検討している。現在の老健の人員では長期的に訪問リハを提供する事は難しいため、集中的なりハビリ実施後は、同法人内の訪問リハサービスやデイケアと連携することも必要であろう。今後地域へ出向く事で、在宅ケアマネをはじめとした在宅サービススタッフとの関わりや連携が今まで以上に増えれば、より包括的なサービスが提供でき、更なる地域リハの充実が可能となるだろう。